

ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集

No.42



2015年2月

日露歴史研究センター事務局 編

目次

【Ⅰ】 外国語文献翻訳 編

- ミハイル・アレクセーエフ著『あなたのラムゼイ リヒアルト・ゾルゲと
中国におけるソ連軍事諜報機関 1930-1933年』より抜粋 (XIV) …………… 1
特務機関の昨日と今日 上海 (1931年1月～9月)
- 5.4. 「マレイとゲルマンは直ちに上海を出発しなければならない…。党员および患者に
つき至急指示をお願いする」(「ラムゼイ」より本部宛て)
- 軍都東京からのゾルゲの報告 …………… 11
「当地の状況における困難な問題は、総じていうならば安全が無いということだ…」
ロシア国立税関アカデミー教授 歴史学博士 ミハイル・アレクセーエフ
- ハイデルベルク大学教授 トーマス カンペン博士からの書簡 (2014. 11. 8) …………… 17
ベルリン—上海—東京 イルゼ・シュテューベとリヒアルト・ゾルゲ
- イタル・タスの記事より (2014. 11. 7) …………… 19
ロシアの外交官 日本にあるゾルゲの墓に献花
- 山崎ブケリチ洋氏が表彰される (2014. 11. 28) …………… 20
51年間、父の国セルビアで日本・セルビアの相互理解・文化交流に貢献

【Ⅱ】 日本語研究論文 編

- ゾルゲ諜報団員・宮城与徳を巡る人々 (中) …………… 22
与徳と絵画談義をした竹久夢二
那覇在住・日露歴史研究センター幹事 上里佑子
- ゾルゲ・尾崎処刑70周年 墓参会「記念講演」(2014. 11. 9) …………… 24
三木清と尾崎秀実の東亜協同体論
専修大学名誉教授 内田 弘
- 第8回「ゾルゲ事件国際シンポジウム」全討議記録 …………… 37
「ゾルゲ・尾崎処刑70周年 新たな真実」
- スパイの子息たち、70年目の証言 …………… 59
「ゾルゲ事件国際シンポジウム」に明るいエール
ジャーナリスト 伊藤三郎
- 時事通信社 高田信二記者【壺中天地】(2014. 11. 12) より転載 …………… 63
- 訂正 『翻訳集』第41号、55ページ左16行目。太郎良譲二氏(…その関係者の子供等で組織する会…)と訂正し、お詫び申し上げます。

表紙の写真

山崎ブケリチ^{ひろし}氏 ベオグラード大学文学部非常勤講師。セルビア共和国・ベオグラード在住。2014年11月28日、駐セルビア日本大使から、「日本とセルビア両国の相互理解と友好親善に大きな功績があった」として、表彰が行なわれた。本誌20ページ参照。(ゾルゲ事件国際シンポジウム会場で撮影 2014. 1. 8)

「ゾルゲ・尾崎処刑70周年 新たな真実」

とき 2014年11月8日 午後1時～午後5時

ところ 明治大学リバティータワー (地下1階1001号教室)



加藤哲郎氏(中央)の報告 左から渡部富哉、吉田臣吾(通訳)、M・アレクセーエフ、白井久也(司会)のみなさん

白井久也(日露歴史研究センター代表)今日は、皆さん。日露歴史研究センター代表の白井久也です。お忙しい中、多数の皆さまにお集まりいただき、センターを代表して心からお礼を申し上げます。

日露歴史研究センターは1998年に創設されてから、ゾルゲ事件の国際的な共同研究のイニシャティブをとり、第1回国際シンポジウム(東京)を開いて以来、モスクワ(ロシア)、オッツエンハウゼン(ドイツ)、ウランバートル(モンゴル)、バクー(アゼルバイジャン)、那覇(沖縄県)、上海(中国)と、過去7回の国際シンポジウムを催し、毎回総勢約30人の会員・協力者から成る代表団を現地に派遣して、開催国の研究者や一般市民との交流を重ねてきました。ゾルゲ・尾崎処刑70周年に開く今回の国際シンポジウムは、第8回となります。日露歴史研究センターの呼びかけで、愛知大学国際中国学センター(政治外交班)、早稲田大学20世紀メディア研究所、NPO法人インテリジェンス研究所が共

催に応じて頂きました。

ゾルゲ・尾崎処刑70周年の記念すべき2014年に開かれる、この第8回ゾルゲ事件国際シンポジウムの象徴的な出来事として、2人の由緒ある人物を紹介します。それはここにおられるポール・ブケリチさんと山崎ブケリチ洋^{ひろし}さんです。(そう言って、来賓席にいる2人を指さす)ゾルゲが東京で立ち上げた諜報団「ラムゼイ機関」には、ブランコ・ド・ブケリチという有名な諜報員がいました。ユーゴスラビア出身のジャーナリストで、当時のアバ通信、のちのフランス通信の東京特派員でした。非常に有能なジャーナリストで、日本に関する記事を執筆するかたわら、ゾルゲ諜報団員としてゾルゲとともに諜報活動に従事して特高警察に逮捕され、北海道の網走刑務所で服役中に獄死してしまいます。ブケリチは生前、2人の奥さんがいて、先妻のエディスさんとの間にできた子息がポールさんです。洋さんは後妻の山崎淑子さんとの間に生まれた子息です。従

大学客員教授、一橋大学名誉教授です。テーマは、『戦後ゾルゲ団』『第2のゾルゲ事件』の謀略?』であります。最近、加藤先生が新しく発掘された資料を基にして、ゾルゲ事件の新しい解明が行なわれるもの、と期待されます。それでは加藤先生、お願いします。

加藤哲郎氏の報告

加藤哲郎（早稲田大学客員教授、一橋大学名誉教授）先ほど白井さんからお話がありました。今年3月に平凡社新書『ゾルゲ事件 覆された神話』を出しましたので、まだお読みでない方は是非、お買い求めになって、読んで下さい。きょうは、この本に書いてあることを繰り返してもあまり意味がないので、これを前提にして、その後わかったことを、お話ししようと思います。

きょうはゾルゲ・尾崎処刑70周年記念として、皆さんがここに集まっておられますが、私がゾルゲ事件について初めて話したのは、ちょうど10年前にゾルゲ・尾崎没後60周年記念集会在東京・目黒の杉野学園で開かれたときでして、そのとき元公安調査庁調査第2部部長の菅沼光弘さんが「日本の防諜活動ゾルゲ事件以後」と題して話して、私は「イラク戦争から見たゾルゲ事件」というテーマで話しました。参加者の顔を見たらお年寄りの方が多くて、これはイラク戦争よりもゾルゲ事件の方に興味がありそうだと思って、イラク戦争の話は簡単にして、ゾルゲ事件に重点を置いて話しました。

そのとき初めて、ゾルゲと尾崎を結びつけたのはアメリカ人女性ジャーナリストのアグネス・スメドレーではなくて、上海に派遣されていた米国共産党員・鬼頭銀一であったこと、野坂参三が米国から行っていた対日工作、上海でスメドレーがやっていた対宋慶齡工作などと、ゾルゲ事件はアメリカ共産党書記長ブラウダーを介してリンクしているのだ、という話をしました。そうしたら1週間後、菅沼さんの部下の若い人が私の研究室へやってきて、「加藤先生、是非、ご協力をいただきたい」と、申し入れてきました。私は「数10年前の記録をきっちり調

べれば、公安情報の中に何回か私の名前があるはずで……」と言って、丁重にお断りしました。（笑）そのとき分かったのは、ゾルゲ事件は、21世紀の日本の公安調査庁にとっても、なお関心がある事項らしいということでした。「ならば…」と思って、私の専門ではないのですが、脇道から研究して行ったのが、積み積み今度の本になりました。（と言って、自著を掲げて見せる）

現在でも私は、自分がゾルゲ事件の専門家だとは思っておりません。ただいろいろな国の公文書館を回って学術資料を収集している関係で、新規に入手した関連資料を紹介してきました。きょうは伊藤律の息子さんである伊藤淳さんがお見えになっていますが、私の収集した資料も一つの典拠になって、伊藤律の名誉回復に結びついたことは、それはそれで大変嬉しく思っている次第です。

実は今朝9時ごろ、パソコンを開いたら、新しいメールが2本入っておりました。そのうちの1つは、宮城与徳に関するものでして、関係者の八巻百合子さんから、たまたま来日中なのできょうのシンポジウムに出席したいというメールでした。宮城は1933年に日本へ来る前に、何故か奥さんと別れて、北林トモの家⁷に下宿して、その後、日本に派遣されます。宮城が米国共産党に入った頃、カリフォルニアで離婚した八巻千代という日本人女性がいます。私は実は、この離婚が政治的な離婚ではなかったかと疑っています。その宮城与徳の元妻・八巻千代の親戚である八巻百合子さんが、きょうこの会場にお見えになっているので、ご紹介します。彼女は今、ニューヨークでジャーナリストをやっています。私が米国で取材するときに、いろいろご協力いただいている方です。つまりこの国際シンポジウムに、ゾルゲ事件の関係者が、米国からも参加しているということです。

ドイツ外務省によるソ連諜報員の名誉回復

もう1つは、ドイツから来たメールです。私のドイツ人の友人で研究協力者である、ハイデルベルク大学のトーマス・カンペン教授が、ゾルゲ・尾崎処

5 元日本共産党議長。

6 中国革命の父孫文の未亡人。

7 米国共産党員で、のち日本に帰国し、ゾルゲ事件で最初に検挙された。

刑70周年に当たって、「3人の男、3人の女の死刑」というタイトルの短い論文を送ってきました。原文はドイツ語なので、私はざっと読んだだけでありますが、要約しますと、次のようになります。

3人の男の二人はすぐ分かると思いますが、ゾルゲ、尾崎で、もう1人はドクトル・ボッシュです。さきほどのアレクセイエフ先生の話にも出てきましたが、ゾルゲの上海での後任諜報責任者はアブラモフ（と言うと、傍にいるロシア語通訳の吉田臣吾氏がロシア語では「アブラム」と発言を訂正する。これに対して加藤哲郎氏は、ドイツ語では「アブラモフ」と言います、とアレクセイエフ教授との間でやり取りが行なわれる）別名プロニン、ベルデンです。そして本名は…（「リヒテンシュタイン」と吉田臣吾氏が言う）。そうです。実は、ゾルゲ事件にとって重要な3人目の男は、上海のドクター・ボッシュ、つまり、リヒテンシュタインであるという話です。

3人の女性の1人は、アイノ・クーシネン、つまりゾルゲと同じ時期に日本で皇室に近づいて諜報活動をやっていたフィンランド人のソ連諜報員です。もう1人は、ウルズラ・クチンスキー、あるいはウルズラ・ハンブルガー夫人です。つまり、上海でゾルゲの助手をして、そのあと赤軍の諜報員として本格的な活動をした別名「ソーニャ」「ルート・ヴェルナー」です。有名なのは、英国滞在中の1942年から43年に核物理学者クラウス・フックスを協力者に獲得し、米国「マンハッタン計画」の原爆開発関係資料を盗み出す手引きをした諜報員です。ここには経済学を専門とする方もおられるので、ご存じかと思いますが、彼女は、有名な経済学者ユルゲン・クチンスキーの妹になります。これが2番目に重要な女性です。

3人目の女性は、イルゼ・シュテューベです。この名前を聞いたことがある人は、ほとんどいないと思います。イルゼ・シュテューベは、独ソ戦情報をソ連に伝え、1942年末にベルリンでゲシュタポに

捕まって死刑になった女性です。彼女がなぜゾルゲ事件と関係したかという、1932年から33年にかけて、上海のゾルゲ団メンバーの交代の時期に、ゾルゲの後継者アブラモフ、つまりドク



加藤哲郎氏

ター・ボッシュがソ連でリクルート（徴募）し、ポーランドで諜報活動をしたあと、ベルリンに潜入して、ドイツ外務省に潜り込み、その職員になってナチス外交の諜報活動をしていたときに、ゲシュタポに捕まって「ソ連スパイ」として処刑された人物です。

カンペン教授がなぜ3人の女だといって送ってきたかと言いますと、イルゼ・シュテューベの歴史的评价について、最近ドイツの雑誌などで議論になっていたのです。実は彼女は「赤いオーケストラ」と呼ばれるナチス・ドイツの中に深く入り込んだドイツ人中心のソ連諜報団の一員でした。彼女はソ連スパイだから反ナチスの闘士として認められないのか、ソ連スパイであってもナチを追い詰めた素晴らしい活動をしたのだから、現代のドイツでは再評価すべきではないか、と歴史学者から問題提起されていたんですね。しかも、ドイツ外務省の中枢部に潜り込んだので、日本で言えば尾崎秀実に近い、ソ連への情報提供者でした。

カンペン教授の私宛のメールによれば、ついにこのイルゼ・シュテューベが、ドイツ外務省によって、今年（2014年）7月11日に、公式に名誉回復された。つまり、彼女はソ連スパイであったけれども、ナチスと闘うという貢献があったため、ドイツ外務省として正式に、同省の中で勇気のあった職員として処遇することになったというのです。日本で言え

8 カンペン教授は、タイトルを「ベルリン—上海—東京 イルゼ・シュテューベとリヒアルト・ゾルゲ」と手を加えて加藤哲郎教授に再送（2014.11.8）してきました。その全文は、この「翻訳集」17ページに掲載してあります。

9 旧東独を代表する経済学者。主著に『資本主義における労働者の状態の歴史』全40巻。

10 ナチス・ドイツの秘密国家警察。

ば、杉原千畝¹¹のユダヤ人救出を思い出していただければ良いかと思えます。外務省から疎んじられていたが、その活動は反ファッショで功績があったということです。

このドイツにおけるイルゼの名誉回復が、何を意味するかが、きょうのこの会にとっても重要です。インターネットで調べたことのある人は分かると思うのですが、今、日本文化チャンネル桜という安倍晋三首相のファンクラブのようなウェブサイトがあって、そこでは「ゾルゲの墓を多磨霊園から撤去せよ」という議論が出てきます。日本を売った「売国奴」であるゾルゲの遺骨をこんな立派な墓にして日本に残していいのかというのがこの人たちの言い分です。実際に「ゾルゲの墓を撤去せよ」という運動が行なわれているのです。

それに対して、白井さんたちは明日（11月9日）、多磨霊園でゾルゲ・尾崎の墓参会をやるというのですから、2つの相反する歴史的評価の対立は、今後も続くことになりそうです。しかし、そういう風になったのは、実はドイツのイルゼ・シュテューベのケースと、日本のゾルゲ・尾崎秀実のケースが、同じような反ファッショ諜報活動であったけれども、ドイツでは公的に評価されて名誉回復し、他方、日本では「スパイの墓はぶっ潰せ」という動きが出ている。第2次世界大戦後70年にあたって、日本の「ゾルゲ事件」とドイツの「赤いオーケストラ」がどのように扱われているかは、両国の戦後の歴史認識の違いに関連している、と考えた方が良いでしょう。

そのために私は、今回は（と言って時計を見て、「あと10分ぐらいありますね」といってから）皆さ

んのお手元にある『レジュメ集』で言いますと、29ページになりますが、ゾルゲと尾崎は死刑になったけれども、その他の戦後に生き残った元被告たちは一体どのように扱われてきたかという問題の検討を始めました。今まで私が元被告の戦後を調べ、ご遺族・関係者のインタビュー等で聞いてきた限りでは、大体、「アカ」とか「スパイの子」として扱われ、多くは沈黙し、苦しい思いでひっそりと生きてきたケースが圧倒的です。尾崎の獄中書簡『愛情は降る星のごとく』が発表された戦後すぐの時期に、尾崎未亡人・お嬢さんがメディアに登場したのは、例外に属するだろうと思います。じゃあ何故そうなったかということ、いろいろ調べていたら、「悪魔の飽食」731部隊¹²とゾルゲ事件の関係という、恐ろしい話になってきました。これを、時間がないようですから、ごく簡単にご紹介します。

占領期右派雑誌『政界ジープ』とゾルゲ事件

私の本の中では、ゾルゲ事件が「赤色スパイ事件」と呼ばれるようになるのは、1949年2月に発表されたいわゆる『ウイロビー報告』¹³からだか書いています。ウイロビー報告発表前の日本では、ベストセラーになった尾崎秀実の『愛情は星の降るごとく』によって、尾崎はむしろ反戦平和を求めた愛国者として扱われていました。ゾルゲや尾崎を批判する人たちも、「スパイ事件」とは言わないで、大体「ゾルゲ事件」と呼んでいました。そこで、私はこれを、占領期のあらゆる出版物を網羅する『ブランゲ文庫』¹⁴で調べて、1949年2月に『ウイロビー報告』が発表されるまで、「日本でゾルゲ事件がスパイ事件と呼ばれたことはない」と著書に書きました。

私が調査した検閲記録の上では、そのことは間違

11 すぎはら・ちうね、1900-1986年。岐阜県八百津町に生まれる。駐リトアニア総領事として、ナチス・ドイツによる迫害を逃れて海外亡命をしようとするユダヤ人たちに、本省の了解が得られぬまま日本を経由するビザを発行、6000人余のユダヤ人の命を救ったといわれている。外務省では冷遇され1947年に退職。1985年、イスラエル政府からは、「諸国民の中の正義の人」を称える「ヤド・バシム賞」を受ける。日本政府は杉原千畝の死後、2000年になってようやく名誉回復を認めた。

12 旧日本軍が細菌戦を遂行するために1933年に創設。ハルビンに設置した特殊部隊の略称。憲兵隊や警察が逮捕した政治犯やゲリラを丸太と呼んで収容、さまざまな人体実験をしたが、敗戦時には証拠隠滅のため施設を爆破、証拠隠滅をはかった。部隊長の名前から石井部隊とも言う。

13 連合国軍最高指揮官総司令部＝GHQの参謀第2部長ウイロビー陸軍少将が、マッカーサー元帥の指令によって、資料を収集してまとめ上げたゾルゲ事件移管する報告書。米国陸軍省が1949年2月10日に、『極東における国際スパイ事件報告書』として発表した。米ソ冷戦構造の下で、ソ連スパイがいかに邪悪なものであるか暴露した反共文書として利用された。

14 日本占領下のGHQ戦史室長ブランゲが在職中に収集して、米国に持ち帰った歴大な日本語文献の検閲記録。メリーランド大学に寄贈され、現在「ブランゲ文庫」と呼ばれている。

いなかったので、実は例外がありました。それは、当時出ていた『政界ジープ』という雑誌でした。当時、雑誌『真相』という左翼系の政治雑誌・暴露雑誌があり、後の『噂の真相』にも影響を与えました。一方、右翼系の方も、1950年代になると『全貌』という反共雑誌を出し始めるのですが、占領期には『真相』と対立する右派雑誌に『政界ジープ』があったのです。この『政界ジープ』の1948年10月号に、なぜか「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」という特集記事が載っています。のちに『ウイロビー報告』の方は、『赤色スパイ団の全貌—ゾルゲ事件—』（福田太郎訳、東西南北社、1953年）というタイトルで日本語版が出版されますが、「赤色スパイ事件」という言葉を使ったのは、どうもこの『政界ジープ』の方が先で、初めてだったようです。

そこで、『政界ジープ』という雑誌はどのようにして発行されていたかを調べますと、1946年8月から55年まで出ていて、56年に「政界ジープ事件」が起きました。当時、被害総額6900万円の「戦後最大の恐喝事件」といわれた事件で、政財界・知名人のスキャンダルを記事にするぞと脅して金をとり、1956年3月に摘発され、雑誌は廃刊に追い込まれました。いわゆる総会屋系雑誌の先駆で、事実記者の中からは、著名な総会屋を輩出します。それまでの間、右翼系の『全貌』のような反共情報を流していた雑誌でした。

その創刊以来の社長が二木（ふたき）秀雄という人物で、なぜか医者です。『政界ジープ』というのは、ジープ社という会社が発行しているのですが、このジープ社が出した単行本には、当時の占領政策の広報宣伝みたいな本が多い。1946年の『連合国の日本管理方策』に始まって、『これがアメリカ』『アメリカ留学ノート』『労働とデモクラシー』『アメリカの味』などです。もう一つ、なぜか厚生省（現厚生労働省）医務局編のインターン向け雑誌『医学のとびら』を、1949年から出しています。なぜこんな出版物をジープ社が出しているのかと調べてみますと、創業者で社長の二木秀雄は、金沢医大（現金沢大学医学部）出身で、731部隊の結核班長でした。戦後731部

隊の人体実験資料は、ひそかに金沢医大に運び込まれて隠匿され、その後、戦犯免責の取引材料として米軍に提供されます。二木は、その資料隠匿の中心にいた人物と思われます。

731部隊残党による『政界ジープ』と「ミドリ十字」

1946年から47年にかけて、極東軍事裁判が始まっても、731部隊の石井四郎部隊長以下関係者は、なぜかみな戦犯として追及されることはありませんでした。公職追放も受けませんでした。なぜならば、彼らは人体実験資料を米軍に渡し、それによって戦犯訴追を免責されたからです。その策動、米軍との取引の中心になったのが内藤良一¹⁵で、その内藤の片腕となったのが二木秀雄のようです。何のことはない、『政界ジープ』という雑誌は、戦後生き残った731部隊の残党が出していた政治雑誌、反共広報雑誌だったわけです。そこで、ゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」とよぶようになるのです。

さらに調べて行くと、731部隊が免責になる、つまり戦犯訴追されないで済む最大の理由は、元大本営参謀の有末精三、服部卓四郎といった、当時GHQのG-2部長ウイロビー少将の下で、旧日本陸軍参謀本部などの重要な情報を米側に提供し、日本の再軍備にあたって大きな役割を果たした連中が、介在したことによるものです。有末精三、服部卓四郎、内藤良一らが、「風船爆弾」に関わった亀井貫一郎の仲介で結びつくのが、1946年から47年です。それ以降、『政界ジープ』とジープ社は、いわば米軍側の意向と反共宣伝の拠点となって行くのです。のちに米軍による占領が終わりますと、米国広報文化局（USIS）のアメリカ文化センターなどができて、米中央情報局（CIA）が裏金を出す活動が始まります。ゾルゲ事件を国際赤色スパイ事件と名付けた雑誌『政界ジープ』の財源は、731部隊の残党たちによって作られたようです。

1950年に朝鮮戦争が始まると、二木秀雄は、731部隊残党の同窓会「精魂会」を作り、自ら代表になります。この精魂会によって、1955年に、ゾルゲの墓がある多磨霊園に731部隊関係者の供養塔が密かに建てられます。英語で“the Unit 731

15 1906-1982年。戦前、日本陸軍軍医学校の防疫研究室に所属、軍医中佐として731部隊にも深く関わった。

Memorial”と書かれています。明日、ゾルゲ・尾崎の墓参会に行かれる方は、第5区1種18側1番に「精魂会 二木秀雄」が建立した「懇心平等万霊供養塔」があるので、是非、ご覧になったらいかがかと思えます。「精魂会」というのは、いくつかある731部隊関係者の同窓会の一つです。

もうひとつ重要なのは、731同窓会が作られた1950年に、「日本ブラッドバンク」が作られて、朝鮮戦争中の米軍負傷者向けの輸血用の血液を売って大もうけします。この血液銀行創立の代表が、内藤良一と二木秀雄でした。やがて元731部隊長北野政次らが加わり、1964年に「ミドリ十字」社になり、これが薬害エイズ事件をおこします。この血液銀行が、731供養塔建立の財源でしょう。

こういう観点で見て行くと、米軍の中のG-2 ウイロビーらが、731部隊の残虐な戦争犯罪を免責したばかりでなく、その残党を米国のために利用してきたことが、見えてきます。ゾルゲ事件と似ています。

ゾルゲ事件などを利用したスパイ防止法制定策動

もうそろそろ時間ですので、ペーパーも簡単に紹介しておきます。レジユメ集の38ページに、米軍が1953年に作った「伊藤雅夫とその仲間たち」というソ連の対日工作スパイ網全図が出ております。このほかに、300人近いソ連諜報員の個人名簿があります。そこには住所も名前も全部書かれているので、プライバシーの関係もあって、今日は公表を差し控えます。この表は、米側が掴んだ1953年におけるソ連の諜報活動の総括図です。平たく言えば、北朝鮮の諜報学校で訓練された伊藤雅夫らが、元山、麗水、海州の港から日本に送られた。

その受け皿は、富山県・魚津の日本カーバイド社富山工場や山口県仙崎港青海島などで、在日ソ連代表部のイワノフらが指導し、神戸の福寿公司や神戸博愛病院などが絡んでいる。しかも、その組織は、朝鮮・樺太引き揚げ者だけではなく、シベリア抑留帰還者、つまり、シベリア抑留から帰国時ソ連に忠誠を誓ってきたと言われている人たちを使っている。

きょう時事通信社の名越健郎さんがいらっしゃっていますが、名越さんが米国で見つけた資料によると、米軍は舞鶴港などでの訊問で、抑留帰還者352人をソ連スパイと判定しました。

それから、この在日ソ連スパイ団と日本共産党の関係ですが、日本共産党の北海道委員会が特に注目され監視されました。なぜならば、北海道はソ連に近い。ソ連からの密航や侵略は北海道からと想定されていた。しかも、ゾルゲ事件関係者の中に、北海道出身者がたくさんおります。彼らの名前は総括図の下の方にあげておきました。その中心は田口右源太です。懲役13年の判決を受けて、戦後釈放されました。それから懲役12年の山名正實も、北海道の活動家です。そして石島栄が入っています。みずず書房の現代史資料『ゾルゲ事件』には出てきませんが、石島栄は、時事通信社の高田信二記者が発掘して事情が明らかになった人物です。日本の特高警察は見逃したけれども、米軍の方はゾルゲ事件の関係者だと言って追跡した、ゾルゲ事件当時のドイツ通信(DNB)日本人記者です。それから山名正實が戦後結婚する相手は、柄沢とし子といますが、当時北海道選出の衆議院議員です。この人の旧姓は、武田とし子です。武田とし子の名前でゾルゲ事件で検挙されましたが、起訴猶予になりました。戦後、山名正實と柄沢とし子は事実上の夫婦になって、北海道の農民運動を共産党の立場から指導していました。

もう時間ですので、以下簡単にします。詳しい話は、あとで私のペーパーを読んで下さい。

1952年に、日本はサンフランシスコ講和条約を締結して独立します。ところが米国は、鹿地亘¹⁶拉致事件を起こした。鹿地亘の釈放後、事件が国会で問題になっているとき（鹿地亘は国会で証人喚問された）に、このソ連スパイ団事件をでっち上げ、何とかしてスパイ防止法を作れるような「第二のゾルゲ事件」に仕立て上げようとした。そのとき狙われたのが、シベリア抑留帰還者と旧ゾルゲ諜報団関係者、当時の日本共産党、さらに言えば朝鮮戦争の真っ最中だったので、在日朝鮮人運動です。リストには在

16 かし・わたる。作家。本名は瀬口貢（1903-1982年）。戦時中、中国で抗日反戦工作に従事。戦後、帰国するが、1951年11月にキャンノン大佐を長とする米軍諜報機関に身柄を拉致され、1952年12月釈放された。

日中国人も出てくるのですが、外国人も絡んで新しいスパイ団が作られたとして、220名の実名で出てくる。その中心人物が、田口右源太というゾルゲ事件の元被告、西館仁という当時の共産党北海道委員会の指導者、及び神戸の中国人等々でした。

つまり、サンフランシスコ条約が発効して、米軍の多くの部隊は本国に引き揚げて、マッカーサーもウイロビー少将も日本からいなくなります。しかし、米軍基地は、日米安保条約で残されました。米軍基地の中には CIC (米軍の対敵防諜機関。カウンター・インテリジェンス・コープス) があります。CIC の任務は、基地のある地域において、対敵諜報活動を行なうことです。日本は政治的に独立しても、日本国内のソ連スパイを、絶えず監視しているのが、CIC なのです。おまけに北海道の CIC 責任者だったジョージ・カーゲットは、マッカーサーやウイロビーが本国に帰国した後も、中央情報局 (CIA) 東京支局の文書調査部長になって残ります。そういうわけで、戦後、ゾルゲ事件関係の資料は、ウイロビー少将が部長だった GHQ の G-2 (参謀第 2 部) から CIA に引き継がれて行くのです。こうして、ゾルゲ事件の関係者たちは、CIC、CIA によって、戦後もずっと監視される体制が作られたのです。米軍の対日ソ連スパイ監視網は、やがて 1954 年にラストボロフ事件を摘発します。その日本人工作員とされた人々のリストには、シベリア抑留帰還者が多数含まれていました。

もっとも、ゾルゲ事件の関係者たちが、実際にソ連諜報団に組み込まれたか、米軍の二重スパイになったかどうかは、別の問題です。田口右源太、石島栄らは、おそらく米軍からもスパイ工作を受けるのですが、拒否します。1人落ちたらしいのが、山名正實です。彼は三田村四郎によって共産党に入党を薦められた関係もあって、共産党の 50 年分裂で柄沢とし子と別れた後、労働運動潰しの反共活動に入っていきます。

そうした中で、特別に重要なのは、川合貞吉です。1949 年に伊藤律を米軍に売った人物です。ゾルゲ事件被告だったことを米軍に売り込み、おそらく米

軍の諜報員となります。そこに山名正實は誘われて、諜報仲間に加わります。彼らに対して金を出していたのは、国策パルプ旭川工場、北海道出身の方はご存じでしょうが、戦前は世界で 1 番大きかった製紙工場で、国策パルプの経営者は、戦前日本共産党幹部の水野茂夫、南喜一らです。おそらく彼らが、川合や山名に金を出していた。1950 年代の共産党の記録には、これには右翼の大物・児玉誉士夫らも絡むと出てきますが、そういう話は、きょうは省略します。

要するに、戦後もゾルゲ事件の関係者たちは、米ソ二重スパイの働きかけを受けるし、また、その子供たちは「スパイの子」としていじめを受けてきたため、なかなか真相が明らかになりませんでした。それがようやく、いろいろな形で分かるようになってきて、それを裏付ける資料を、アレクセーエフ先生や私が発掘できるようになったのです。もっともまだ、中国関係の資料が「藪の中」で、何とも歯がゆい感じがするのですが、私に言わせると、ゾルゲ事件研究は、これから始まります。

その際に、どういう観点で真相を解明していくかということ、私はやはり、ドイツ外務省に入り込んでスパイとされてきた「赤いオーケストラ」の女性職員イルゼ・シュテューベが、今日ドイツ外務省自身の手で名誉回復した事実注目したいと思います。さきほど報告した渡部富哉さんは、松本三益の件で「日本共産党に詫言させよう」と言っていたことが、そんなケチなことは言わないで、日本の旧内務省、今日の法務省・警察庁、裁判所に、ゾルゲ事件をもう一度再審するようすすめたらいいいのではないかと。これが、私のゾルゲ・尾崎処刑 70 周年に当たっての、締めくくりです。(拍手)

司会 加藤先生を最後にして、予定していた 5 人の先生方のパネリスト報告を終わります。このあと質疑・応答に入ります。

◆お断り 質疑・応答は、会場の皆さんを交えて約 20 分間行なわれました。しかし、紙数の関係上、割愛させていただきます。(日露歴史研究センター事務局)

2014/11/12-11:00

【壹中天地】第96回 時事通信社編集委員 高田信二

「ゾルゲ・尾崎処刑70周年」国際シンポジウム

今年11月7日は、戦前に起きたいわゆる「ゾルゲ事件」で、ソ連軍事諜報員リヒアルト・ゾルゲとその盟友で元朝日新聞記者の尾崎秀実が国防保安法違反などによって処刑されてちょうど70年。それを記念して、先日、都内で国際シンポジウムが開催されるというので聴講してきた。

◇ブケリッチの子息も参加



ゾルゲ事件国際シンポジウム(筆者撮影)

主催は日露歴史研究センター(白井久也代表)で、ゾルゲ事件に関する国際シンポジウムは過去にモスクワや上海などでも開催したことがあり、今回はこれで8回目だ。同センターは年に4回、「ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集」を発行しており、恐らく、世界的に見ても、これだけの規模でこれだけ長く続く研究会はまれだろう。

会場には、元アヴァス通信(現AFP通信)東京特派員で、ゾルゲ諜報団の一員だったブランコ・ブケリッチ(1945年、網走刑務所で獄死)の子息ポール・ブケリッチ氏がオーストラリアから、山崎ブケリッチ洋氏もセルビアから来賓として参加し、まさに国際シンポジウムにふさわしい会となった。

講演会には5人のパネリストが登場した。作家で日本ペンクラブ理事の小中陽太郎氏(「ゾルゲ断章—わたしの執筆ノートより」)、中国・復旦大学教授の蔵志軍氏(「中国におけるゾルゲ関係研究について」)、社会運動資料センター代表 渡部富哉氏(「ゾルゲ事件端緒説をめぐる諸問題」)、ロシア国立軍事公文書館研究員ミハイル・アレクセーエフ氏(「整理が急がれたゾルゲ諜報団『ラムゼイ機関』」)、早稲田大学客員教授加藤哲郎氏(「『戦後ゾルゲ団』『第二のゾルゲ事件』の謀略?」)の5人だ。

◇ゾルゲ事件と731部隊との意外な関係

残念ながら、ここではすべてはご紹介できないので、1人だけ、最後の加藤氏の講演

を紹介したい。私としても衝撃的だったからだ。

話は長くなってしまふので、簡略化して書くことにするが、ゾルゲ事件と戦争中に中国で人体実験をしたとされる石井四郎陸軍軍医中将率いる「731部隊」との意外な関係だ。もちろん、直接の接点は全くないが、加藤氏の説明によると、これまで極秘扱いだったゾルゲ事件は戦後、国際的なスパイ事件だと大々的に喧伝されることになるが、その最初となるのが「政界ジープ」という右派雑誌の48年10月号に載った「尾崎・ゾルゲ 赤色スパイ事件の真相」という記事だったという。

この政界ジープ社の社長が二木秀雄という金沢医大出身の医者で、731部隊(結核班長)に所属していた。戦後、石井四郎をはじめ、関係者はなぜか戦犯にならず、東京裁判でも訴追を免れたが、それは、すべての関係資料をGHQに提供して尋問に答えるなど「司法取引」が成立したためだと言われている。その膨大な関係資料を一時保管した場所が、金沢医大であり、米軍側に資料を提供したのが京大医学部出身で731部隊残党組だった内藤良一(日本ブラッドバンク=後のミドリ十字=を創設して、朝鮮戦争の際に利益を得る)と二木だったという。その元731部隊員と米軍を仲介したのが、有末精三、服部卓四郎といった旧陸軍将校で、彼らは戦後、日本の再軍備に重要な役割を果たすことになる。

◇利用された「ゾルゲ事件」

戦後まもなく「愛情は降る星のごとく」がベストセラーになって「愛国・反戦主義者」と言われていた尾崎秀実は、一転して「売国奴のスパイ」という見方が提供されることになる。また、当時のGHQ内で絶大な権力を誇示していた参謀第2部(G2)のウィロビー少将による報告書が49年2月に発表され、ゾルゲ事件が「国際スパイ事件」として世界的に認知されていくという流れもあった。GHQによる日本占領政策が当初の「非軍事化・民主化」から反共防波堤のための「再軍備」の方向に大きく舵を取られ、マッカーシズムが吹き荒れる中、ゾルゲ事件も利用された面があったのだ。

二木らは米軍に731部隊関係の書類を提供して訴追を免れる代わりに、彼らが創刊した雑誌「政界ジープ」や書籍で、米軍の意向に沿った宣伝や、反共活動、そして、「ゾルゲたたき」のメディアとして使われたのではないか、というのが加藤氏の見立てだった。ちなみに、政界ジープ社は56年に一流企業や政治家らの暴露記事をネタにした戦後最大の恐喝事件を起こし、雑誌は廃刊となった。

これらは現代史の闇に葬られたような話で、私も改めて、ゾルゲ事件の大きな影響力を感じてしまった。(了)

次 号 予 告

昨年11月8日の「第8回ゾルゲ事件国際シンポジウム」で、現代ロシアを代表するゾルゲ事件研究者、ミハイル・アレクセーエフ氏は、「整理を急がれたゾルゲ諜報団『ラムゼイ機関』というテーマで報告を行ないました。(本誌「シンポジウム全記録」参照) 一般に、ゾルゲの諜報活動は「極めて優れたものであった」という評価が定着していますが、アレクセーエフ氏のシンポジウム報告によると、モスクワの諜報局本部のプロたちの評価は、逆に「極めて低いものであった」だけでなく、ゾルゲ諜報団「ラムゼイ機

関」は、最終的に整理を迫られていたことを実証的に明らかにする、非常に衝撃的な内容でした。

しかし、当日は報告時間の制限があったうえ、会場で配布された『レジュメ集』の報告も編集の都合上、原文を大幅にカットされ、アレクセーエフ氏の意を尽くしたものとは言えませんでした。そこで、アレクセーエフ氏がシンポジウムのために用意したレジュメ全文を収録して、日本のゾルゲ事件研究者の参考に供することにしました。

乞う、ご期待を!

ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集

No.42

2015年 2月12日 発行

発行・編集

日露歴史研究センター事務局

連絡先

〒215-0005

神奈川県川崎市麻生区千代ヶ丘4-17-5

川田博史

Tel/Fax 044-955-8068

頒価700円

※禁無断転載・コピー